2013・平成25年

復習用現代語訳

もともと私は紹聖三年の秋から宛丘の南門にある霊通寺の西堂に移り住んでいた。その年の十二月、海棠（かいどう）を二つ自分で西堂に植えた。翌年の正月には雨が程よく降って海棠がすくすくと伸びた。二月には花が咲きそうだったので、私は飲み友達としめしあわせ、美酒を取り寄せて海棠を見ながら酒を飲もうとした。

二月六日、私は左遷を命ぜられ、旅装を整えて黄州に行った。その後、世の中が騒がしく私も住まいを移したので、それ以降花を見る機会がなかった。黄州に来て一年になろうとしたとき、霊通寺の僧から手紙が来て、以前と同じように海棠の花が咲いたと言ってきた。

そこで私は思った。この海棠を植えた場所は、私の寝室から十歩も離れていない、近所の人や親戚と酒を飲んで花を楽しもうと思えば、当然簡単にできる。しかし黄州に着くともうそれはできない。このように、将来の事は予測できないものだ。今、海棠からの距離は千里にもなろうとし、その上わが身は罪に問われている。私が今後どうなるかは自分でもまだ分からず、私が海棠をすぐに見ることもまだできない。しかし両者（①私がどうなるか②いつ花をみるこ

とができるか）とも予測不可能という点において、（よい事が起きる可能性もあるのだから）どうしてこの花が突然私の目の前に現れないとわかろうか。いや、わからない。（私の左遷が許されて、この花が私の前に現れることもあるだろう。）※その後筆者は中央政界に復帰した。

訳注

3行目「一酔」6行目「一飲」の「一」は他の用例から判断するといずれも「一回」の意味であり「一緒」ではない。

8行目の「其」は私（筆者）。理由は、文章が次のような対句になっているから。

其行止、未能自期、其の行止は未だ自ら期すること能わざれば、
其于棠、未遽得見　其の棠に于いては未だ遽かには見るを得ざる也。

音読用書き下し文※音読のためルビと送りがなの歴史的かなづかいは今のかなづかいに変更。

始め余丙子の秋を以て宛丘南門の霊通禅刹の西堂に寓居す。是の歳の季冬、手ずから両海棠を堂下に植う。丁丑の春に至り、時沢

屢至り、棠茂悦するなり。仲春、且に華さかんとす。余常に与に飲む所の者と約し、且つ美酒を致し、将に樹間に一酔せんとす。

是の月の六日、予謫書を被り、治行して黄州に之く。俗事紛然とし、余も亦た居を遷し、因りて復た花を省ず。黄に到りて且に周歳ならんとす。寺僧の書来たりて、花の自如たるを言うなり。

余因りて思うに、茲の棠の植えし所は、余の寝を去ること十歩と無く、隣里親戚と一飲して之を楽しまんと欲せば、宜しく必ず難きこと無きを得べきなり。然れども至るに垂として之を失う。事の知るべからざること此くの如し。今棠を去ること且に千里ならんとし、又た身は罪籍に在りて、其の行止は未だ自ら期すること能わざれば、其の棠に于いては未だ遽かには見るを得ざるなり。然れども均しく知るべからざるに于いては、則ち安くんぞ此の花の忽然として吾が目前に在らざるを知らんや。

※之く：コ p140

□左遷のわが身を憂えて文をつづる典型的パターン。p

【主張をつかむ】

ステップ1　**最初の2行を読む**

「始め余（私は）…」傍線(1)で停止。

ステップ2　最後の3行を読む

オシリから　読むとわかるよ　お結論 m10

早読みは　最初と最後に　主語述語 m9

うしろからながめると、文末の読みが問われているので、ここは読まない。最後の3行の最初（8行目）を見ると、その直前の「今」から始まる。1字だけ最後の4行を読むことになるが、この字は見逃せない。「今」は[今の世はまちがっている！]のキーワードなので、ゼッタイ必ずどこかの設問になっている。しかも[対比に注意！]すると、1行目の「始め」と「今」が対比になっている。

そこで、傍線(1)を無視して2行目を読み、最初の2行と最後の3行を共通の言葉で対比させると次のとおり。

始め　余（よ）…A 棠（どう）茂悦注7盛んにしげり成長

⇕ 対比

今　棠（どう）を去ること且（まさ）に千里ならんとす。又（また）身（み）は罪籍に在り

漢文の対比は露骨に「ヨイ！ダメ！」だから m12、

始め：ヨイ　私…A 棠（どう）成長

⇕ 対比

今　：ダメ　棠（どう）から遠く離れ、自分自身（私）は罪人

としておいて傍線A問2の選択肢をながめる。

問2　コレだけ知識{今}{対比}{熟}

ヨイ・ダメの言葉だけに着目すると次のとおり。

①喜・満足
②豊作・幸福
③喜・退屈
④閉口・楽しみ
⑤喜・不安

傍線Aはヨイなので、ダメを含む③退屈④閉口⑤不安は消え、正解は①か②。「正解は正確な訳で作られる」m19ので、①の「寺院」は1行目「霊通禅刹注3寺院」にあり、②の「豊作」は原文にない。そこで①が正解

ステップ3　**最終設問の選択肢**を見る

問2の処理で3分を使ったので、問8「筆者の心境」の選択肢は見ないで退却。でも、筆者の心境の一部が「昔ハッピー、いまサイテー」であることは問2でわかった。これで十分。これが大事。

問1　論理の問2をかたづけて問1を解こうとしたが、(1)が少し難しい。

(1)　「手植」が「自分の手で植える」ことから「自分で植える」ことだとわかり、「手＝自分の手で→自分で、みずから」と見当はつい

たが、選択肢がしぼりにくい。そこで意味を考えながら消去した。「技術」でくくれたのが①④⑤。①は「名手：すばらしい技術の持ち主；○○の名手だ」、④は「手腕：すぐれた技術；手腕を発揮する」、⑤は「手法：技術；各種の手法を駆使してセンター試験に勝つ」。

②「挙手（きょしゅ）」は「手を挙げる」だから「手」は「手」そのもの。③は「手記（しゅき）；彼の手記によれば…」だから「彼が自分で書いた記録」が「彼の手記」。よって正解は③。

(2) 〈熟〉

原文は「美酒を致」だから、「…を致」は動詞だろう。すると、選択肢の中で動詞になるのは②「招致する」と⑤「一致する」。受験のウラわざ「1字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！」174で二字熟語は上下同じ意味の漢字が原則だから、②「招＝致＝まねく」⑤「一＝致＝一つになる」と考えておいて原文にあてはめると、

②「美酒を招き寄せ→美酒を取り寄せ、将に樹間（じゅかん）に一酔（いっすい）せんとす」

⑤「美酒を一つにし→各種の美酒をブレンドして一つにし、将に樹間に一酔せんとす」

となり、⑤は「各種の」「ブレンド」という言葉を補う必要がある。

「正解は　正確な訳で作られる」m19のが大原則だから、「各種の」といった言葉が原文にないので、②が正解。

「致」の意味は「ある地点・状態に移る」なので、各選択肢は次のとおり。③「極致（きょくち）」は「極＝致」ではなく「極＋致」であり、「極→極＝端」。よって「極＋致→端＋致→端に行く→行った端っこ：美の極致」。⑤の「一致」は「一＝致」でなく「一＋致」。よって「一致→一点に行く→同じ点に行く→同じになる」。これが本当の意味。

「風致」は「風＋致」で、「風＝風景＝情景」が「致＝ある（よい）状態に移る」ことから「美しいさま」。「筆致」も「筆＋致」で、「筆」が「致＝ある地点に移ること」から「筆跡」。

なお、「致」は「致す（いた）」と読むが、それを知っている必要はまったくないし、知っているとむしろ混乱するだろう。

問３　〔熟〕

受験ウラわざ「１字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！」174による。「省」で思いつく熟語は「省→反省＝ふりかえる」と「省→省察」。「省察」の「察」をもうひとひねりすれば「察→観察＝よくみる」。だから省は「ふりかえってよくみる」。するとＢは「花を

省ず→花をふりかえってよくみない」となり、「花を見ることがなかった」の③が正解。

「復(ま)た」という読みから④「また」①「ふたたび」②「もう一度」⑤「二度」という選択肢が作られたが、いずれも「省」に相当する訳がない。「復(ま)た」という知識だけに頼るとかえって失敗したかも。

「省」には「省略→省＝略＝はぶく・省略する」という意味もあるが、選択肢にない。なお、ここでの「省」の読みは「省(かえりみ)る」だが、知っている必要はない。

問４　〔注〕〔熟〕

受験のウラわざ「説明・注で正解つかめ！」[176]で注の４～12を使い、且(まさニ)二(ント)……一(す)[159]で傍線Ｃの前後を訓読すると次のとおり。

丁丑の春（１０９７年）棠（バラ）茂悦（盛んにしげり成長）…謫（左遷）…黄州に之(ゆ)く…黄（州）に到りて且(まさ)に周歳ならんとす。Ｃ寺僧の書来たりて、花の（が）自如（以前と同じように花を咲かせた）たるを言ふ

次に「1字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！」[174]で「周」の熟語は「一周」。「歳」は「とし」だから「周歳」は「一年」。季節

は注4と12より「バラが咲く春」。したがって正解は、左遷から一年たった年の春だから③。

問5　〔漢〕

「与」は「与(と)」〇」154であり、〇は人か物。だから読みは「隣里親戚と」。そこで③④⑤が消えて①と②が残る。宜(よろシク)二(ベシ)……一162は「宜(よろ)しく……べし：……するのがよい」なので傍線部Dに続く文の読みと直訳は次のとおり。

宜(よろ)しく必ず難(かた)きこと無きを得(う)べき　　なり。

必ず　困難でないことができる・のがよい　のだ

直訳だけでは意味不明だが、「よい」と「だ」は両方とも肯定だから、「よい」と「だ」を無視すると次のとおり。

必ず　困難でないことができる・のがよい・のだ

必ず　簡単にできる←

これを原文にあてはめると次のようになる。

バラの植ゑ(え)し場所は余(よ)の寝室を去ること十歩と離れて無く、

②近所の人や親戚と一緒に飲んで之（バラ）を楽しもうと思えば

必ず簡単にできる

となって②が正解。

なお、「宜しく…べし」は「…がよい」という訳からもう少し強くなって「…が当然だ」という訳もあり、原文を「当然」で訳すと次のようになる。

バラを植えた場所は私の寝室を去ること十歩と離れていないので、近所の人や親戚と酒を飲みながらバラを楽しもうと思えば当然簡単にできる。

選択肢①の「近所の人や親戚と酒を飲もうと思ってバラを楽しむのは」もよいのだが、この情景は少し不自然だ。「飲む＝酒を飲む」では未成年者がイメージしにくいだろうから、「酒を飲む」を「ケーキを食べる」に言い換えると次のとおり。

①「酒を飲もうと思ってバラを楽しむ」

②「酒を飲んでバラを楽しもうと思う」

←

①「ケーキを食べようと思ってバラを楽しむ」

②「ケーキを食べてバラを楽しもうと思う」

←　少し補足

①「ケーキを食べようと思って（その前にorそのために）バラを楽しむ」

②「ケーキを食べて（そのあとor同時に）バラを楽しもうと思う」

となり、①は「バラを楽しまないとケーキを食べられない」変な人であり、②は「バラを見ながらケーキを食べる」あるいは「桜を見ながら酒を飲む」普通の人だ。

他の選択肢を訳すと次のとおりいずれも変な状況。

③近所の人や親戚の飲み会に参加しようと思ってバラを楽しむのは

④近所の人や親戚に参加しようと思って酒を飲んでバラを楽しむのは

⑤近所の人や親戚に与えて、酒を飲んでバラを楽しもうと思うならば

問6　訓読して訳すだけ。「知るべからざる」→「1知ることができない（または）2知ることはいけない」→「1知ることができない」→④「予測できない」。「2知ることはいけない・知ってはならない」に相当する選択肢はない。

他の選択肢について、①知人を見つける、②自分勝手に判断する、③理解される（受身）、はいずれも「知る」の意味ではない。⑤の「…とは限らない」は部分否定[104]だが、「必ずしも」「常には」のような「ズシモ」と「ハ」が原文にないので、正解にならない。

問７　長い漢字の列にビビるが、一字ずつ丁寧に解読すれば簡単だ。「安」の読みと意味は反語[56]疑問[80]の「いづくんぞ：どうして」または「いづくにか：どこに」。原文は「安知」だから、「いづくんぞ知らんや：どうして知ろうか→どうしてわかろうか（疑問）、いやわかりはしない（反語）」。原文が「安在」ならば「いづくにかあらん（反語）、いづくにかある（疑問）：どこにいるのか」となるが、「安」の下が「在（あり）」ではないので選択肢は②③⑤。

「此」は「この・これ・ここ」という指示語。日本語に限らずどの言語でも指示語は直前を受けるから、直前の棠（バラ）を受けて「此（こ）の花」と読んでいる③が正解。特定の場所が直前にあれば「ここ」もあり得るが、原文にはない。

なお、選択肢の[解釈]は書き下し文を直訳したものなので、わかりやすい日本語になっていない。だから意味を考えたら失敗する。

問８　最終設問なのだから「文章全体から読み取れる筆者の心境」と書いてあっても問われるのは筆者の主張。したがって、文章の大原則[最初と最後で　筆者は主張[mg]]により原文最後（＝傍線部Ｆ＝問７の正解③）から次のように正解に至る。

問7③どうしてこの花が思いがけず私の前に存在することがないと分かるだろうか。

←原文の語尾は「んや」で反語だから、次の訳を補う。

いや、分からない。

←

この花が思いがけず私の前に存在することがないと分かるか。いや分からない。

←

この花が思いがけず私の前に存在することがないとは分からない。

←二つの「ない」「ない」は一つの肯定「ある」

この花が思いがけず私の前に存在することもある

←

⑤いつか…再び…花を愛(め)でるときが来る

正解の確信を得るため、問2でつかんだ筆者の主張の一部「昔ハッピー、いまサイテー」で確認すると、「昔ハッピー、いまサイテーだが、⑤いつか…再び…花を愛(め)でるときが来ると…とらえ、乗り越えようとしている。」となって話の筋は合う。

他の選択肢にはFの直訳を含む部分がまったくない。しかし、問7であきらめてフィーリングで誤答を選んだか、問7までは正解にたどりついたが、右のような推論ができずやむなく討死したか、そんな受験生が多かったのでは？

問７と問８でつまづいた者は、まずコレだけ知識を確実にせよ。量は多くない。次に、「正解は　正確な訳で作られる」m19のだから一字一句機械的に訳すという翻訳の基本作業を行え。そして最後に、

最終設問は筆者の主張を問うm5

最初と最後で　筆者は主張m9

オシリから　読むとわかるよ　お結論m10

により、問８が、筆者の主張の結論であるオシリ（＝傍線F）の訳であることを肝に銘じよ。そうすれば自分勝手な「夢想」が消えて満点に至る。